

## □ ピアノ

## 真嶋雄大

2020年に世界を席捲した新型コロナウイルスによる感染症(COVID-19)は、2021年に入って終息するどころか、種々の変異株まで発生し、それに伴って緊急事態宣言や蔓延防止重点措置が発出、解除を繰り返す大混乱によって、日本経済はもとより音楽業界も逼迫されて青息吐息、甚大なダメージを被っている。

そんな状況下ゆえ、音楽関連のイベントやコンサートが軒並み延期、中止を余儀なくされる一方、音楽を発信する側と受容する側双方の、音楽の灯を消すまいとする希求は強靱であり、SNSやオンラインでの配信など新たな活路を見出し、METのライヴ・ビューイングやバーデン＝バーデン祝祭劇場オンライン音楽祭、また東京・春・祭のライヴ・ストーリーミング配信など、各主催者は多様な試みに尽力を重ねた一年でもあった。

外国人ピアニストも入国制限はあったものの、1月にはヤノシュ・オレイニチャクや、チェンバロ、フォルテピアノ、スタインウェイを弾き別けたアレクサンドル・メルニコフが話題となったし、何より16年ぶりとなる来日リサイタルに登場したのがダニエル・バレンボイム。オール・ベートーヴェンのソナタ公演であり、ある公演では予定曲を全曲間違えるというハプニングはあったものの、重厚な足跡を残した。

秋になると感染者数が一時激減し、その間隙を縫うように、10月には最後の来日リサイタルとなるであろうペーター・レーゼルが、14年前の来日初リサイタルと同じプログラムで演奏、同月ラファウ・ブレハッチ、11月にはエフゲニ・キーシン、ビョートル・アンデルシェフスキ、そしてクリスティアン・ツィメルマンが垂涎のコンサートで聴衆を魅了した。

日本人ピアニストの活躍も顕著だ。三船優子、上原彩子などがそれぞれ華を競い、J.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」のスペシャリスト、高橋望はさらに高度な内容を示し、黒田亜樹と水谷川優子(チェロ)は前代未聞、オール・ヴィアラ＝ロボスでのリサイタルを敢行、清水和音の「名曲ラウンジ」お昼時コンサート」は28回を数えた。また佐藤卓史は第15回となるシューベルト・ツィクルスを継続中で、田部京子による「シューベルト・プラス」シリーズも快調。

昨年は1年遅れの第18回ショパン国際ピアノコンクールが開催されたが(後述)、その入賞者である横山幸雄はデビュー30周年を迎え、「入魂のショパン・シリーズ」や「ベートーヴェン・プラス」シリーズなど気を吐くと同時に、異業種バトルとも言えるジャズの山下洋輔とのデュオ・ピアノでも新境地を開いた。またデビュー25周年の宮谷理香はフランクやショパンで、同30周年となる高橋多佳子はシューマンとブラームスで、各々記念リサイタルを開催している。

またショパンコンクールとチャイコフスキーコンクールの双方に日本人として唯一入賞した小山実穂恵は、2019年からの「ベートーヴェン、そして…」シリーズを継続、彼女にとって初録音となる「ソナタ第30番、第31番、第32番」もリリース。またショパンコンクールで日本人最高位(第2位)の内田光子はザルツブルク音楽祭でシューベルトを演奏、3年ぶりの帰国リサイタルでもシューベルトとベートーヴェン「ディアベリ変奏曲」

を演奏している。

他のメモリアルを鑑みると、樋口紀美子は東京デビュー40周年記念リサイタルでJ.S.バッハ、ショパンなどを、20周年のタカヒロ・ホシノも連続リサイタルを開いたが、ホシノは昨年、ロンドンでのメデイチ国際コンクールで第2位、モスクワ国際コンクール第1位及び特別賞など、15の国際コンクールで優勝、上位入賞をするという、いまだ衰えぬチャレンジ精神で見事な成果を顕示している。

古楽系に目を向けると、BCJの音楽監督である鈴木雅明は子息の優人と東京では初の親子共演となる2台チェンバロによるコンサートで聴衆の圧倒的な支持を得、小倉貴久子は「フォルテピアノの世界」でチェルニー、フンメル、リースと向き合い、さらに「フォルテピアノ・アカデミー SACRA」で8台の鍵盤楽器、即ちクリストフォリやジルバーマン、ヴァルター、ロードウッド製スクエア、クラヴィコードを駆使した演奏会で共感呼んだ。鈴木優人は、チェンバロによるJ.S.バッハ「平均律クラヴィーア曲集第1巻」でもその高いクオリティを示している。また古典鍵盤楽器奏者の高田泰治はベートーヴェンの「皇帝」をフォルテピアノで、その4日後にはJ.S.バッハ「平均律クラヴィーア曲集第1巻」をチェンバロで弾くという快挙を達成。9月には、「ゴルトベルク変奏曲」を渡邊順生がチェンバロで、上杉春雄がモダンピアノで、さらにヴァイオリンの松原勝也などが弦楽五重奏でそれぞれ演奏するという演奏会も開かれた。

日本が誇る先達である館野泉、深沢亮子、田崎悦子という80代を迎えたピアニストたちも実に元気に演奏活動を展開する一方、多数の若手の台頭も著しく、将来が楽しみだ。

その若手の登竜門である国際コンクールについては、第18回ショパンコンクールが開催され、カナダのブルース・リウが優勝、内田光子と並んで日本人最高位となる第2位に反田恭平、同位にかつて浜松国際ピアノ・コンクールを制したアレクサンダー・ガジュヴ(イタリア)、続いて第3位にマルティン・ガルスシア・ガルシア(スペイン)、第4位に小林愛実とヤクブ・クシュリク(ポーランド)という結果を得た。他にも日本人ピアニストの活躍は目覚ましく、第14回シューベルト国際コンクールでは安並貴史が優勝、ルービンシュタイン国際ピアノコンクールで桑原志織が第2位、エリザベート王妃国際音楽コンクールでは務川慧悟が第3位、阪田知樹が第4位入賞を果たした。他方、昨年開催予定だった第11回浜松国際ピアノコンクールは中止となったが、代わりに「浜松国際ピアノ・フェスティバル2021」が11月に開催され、若手からベテランまで多彩なピアニストがステージを飾った。その他の国際コンクールでも、コロナ禍の影響で渡航ができず、参加を断念するコンテスタントが多く存在したことは、不可抗力とは言え残念。ちなみに反田恭平は「Japan National Orchestra」という、世界でも類例のない株式会社組織のオーケストラを創設、代表取締役社長としても腕を奮っている。

また国内の受賞では、第31回日本製鉄音楽賞 フレッシュアールティスト賞にフォルテピアノの川口成彦、第47回日本ショパン協会賞に藤田真央と伊藤順一、第22回ホテルオークラ音楽賞には葵トリオ(ピアノ:秋元孝介)とカルテット・アマビレが輝いた。

最後に昨年、国内外で惜しくも逝去されたピアニストを列記する。2月4日に横井和子(101歳)、3月7日ドミトリー・バシキーロフ(89歳)、3月29日遠山慶子(87歳)、8月8日斎藤雅広(62歳)、10月6日神谷郁代(75歳)、11月1日ネルソン・フレイレ(77歳)、そして12月28日フォー・ツォン。皆、時代を築いた偉大なるピアニストたちであり、心からその冥福を祈る。